

音楽は嗜好品か？ あるいは嗜好品は音楽たりうるか？

武庫川女子大学教授／情報美学・メディア環境論 藤本 憲一

1. 嗜好品の「音風景」今昔

「音楽は嗜好品か？」といえ、YES という声と、NO という声が半ばするのではない。この出発点から、考えを述べたいと思います。

このテーマで、われわれの嗜好品文化研究会では、2016年度に3回の研究会を開きました。まず、「音楽の感動を科学する」というタイトルで奈良教育大学の福井一さん、2回目は「音楽の聴き方」というタイトルで、音楽は祈りや宗教に近く、生命に対する感動のようなものだという内容で京都大学の岡田暁生さん、3回目は「ノリビト論——音楽する社会・再考」というタイトルで、関西大学の小川博司さんのお話を伺いました。

さらに、私が主宰している武庫川女子大学の情報美学研究会でも2回、音楽をテーマに研究会を開きました。1回目は甲南大学の中町信孝さんのアラブポップスの話で、エジプト・アラブでは歌謡曲が政治的であり、「アラブの春」革命をめぐって、ポップシンガーはどちらにつくのか時々刻々、週ごとに歌をつくって、俺はムバラク派とか、俺はアンチ・ムバラク派だとかプレゼンしないと、歌手として立ち行かない。そういうポップスの位置づけがあるという話でした。

2回目は、山口大学の斎藤完さんの「美空ひばり」論で、音楽の位置づけが今とはまったく違う、日本に国民歌手がいた時代の話です。その意味では、今のJポップと全然位置づけが違っていた。ポップスが国民的、政治

的、ナショナルな時代が、今のエジプト・アラブにあり、かつて昭和の日本にもあったのではない。その意味で、音楽は嗜好品なのか、あるいは栄養や食料とは違う別の意味で、ある種の必需品なのかという問いが立てられそうだという点から、出発したわけです。

以上のような「嗜好品と音楽」についての耳学問を前提に、問題提起としていきたいと思います。「嗜好品と音楽／音楽と嗜好品」という言葉から、私たちはどういうことを連想するでしょうか。

50歳代後半の私が、まずイメージする「嗜好品と音楽」の原風景的なサウンドスケープは、かつてのジャズ喫茶で、今のカフェとはまったく違う景色でした。タバコがもうもうとけむり、コーヒーを片手にジャズに聴きほれるシーンです。私が若い頃に通ったジャズ喫茶などは私語禁止で、注文するときも黙ってメニューを指し示す。友だち同士で勝手に話したりするとマスターにめちやくちや怒られる。音楽が主役で、タバコとコーヒーという無言の嗜好品享受はいいが、おしゃべり厳禁という、マスターの独裁空間がジャズ喫茶でした。大きいスピーカーが本尊として鎮座し、レコードと本が脇を固める宗教空間のようでした。

それと対照的な喧騒に満ちた、猥雑な「嗜好品と音楽」の原風景として、ドイツ系ビアハウス（ホール）がありました。1時間ごとに生演奏があり、客も立ち上がって一緒に歌わないといけないうルールで、「アイン・ブロージット♪（酒宴の歌）」で乾杯を繰り返すと、

酒が音楽を呼び、音楽が酒を呼ぶ。きょうびの若者は、あまりカラオケで飲酒しないようですが、かつて嗜好品と音楽は非常に協調性があった。親和性が高い同時随伴現象であり、どちらかが原因、どちらが結果ということではなく、共起性が高かった。

そして、いま私が否応なくさらされている音風景は、ピザパーティです。ゼミなどで盛り上がると必ずピザパーティになる。女子大教師などをやっている、これが何よりも苦痛です。宅配ピザなんて、だいたい味は似ているのに、クリスマスになると学生たちが、「こんな日に勉強している場合ではないの、せめてピザパをやって」ということで、1日に2回、学年が違うごとにピザを食べさせられる。ピザとコーラ、You Tubeの明るい音楽がエンドレスにリピートされる。僕ら教師の嗜好はまったく無視された形で、延々と女子大生のノンアル宴会が繰り返されるわけです。これに耐えられないと女子大教師は勤まりません(藤本憲一「ピザパ栄え、酒宴減ぶ？——女子大生の新しい聖餐とは」『Vesta』106号、味の素食の文化センター2017参照)。

さらに、酒と音楽が強烈に結びついた現代の事例といえば、クラブです。通常のライブはあまり飲食を伴いませんが、クラブではEDM(エレクトロニックダンスミュージック)の大音響と、DJとレーザー光線、後ろに流れるVJ(ビデオジョッキー)映像といったマルチメディアが組み合わせさり、音楽の総合芸術に酔いしれる。これが一つの宗教的な境地にまで達しています。クラブという場所は「音箱系」ではみんな音楽を楽しみ、「野獣系」ではナンパしかしてないという噂で、二極化しているようですが、これは「音箱系」の話です。

2. 「ヒマ」なときの「アンチ・ストレッサー」

このように今も昔も、音楽と嗜好品、嗜好

品と音楽は相性がいい。では、そもそも音楽そのものは嗜好品か？

よくある従来の議論としては、音楽は嗜好品ではない、ノーだ。口にも入らない、聴覚体験だ。嗜好品じゃなくて趣味・教養だ、という否定的な意見です。

一方、生命、生活にとって特に必要ではないが、物質的ではなくて精神的な意味では、非常に嗜好品的ではないか、イエスだという肯定の意見もある。

あるいは、音楽を崇拝する人にとってみれば、嗜好品よりももっと高次の多彩な機能がある、嗜好品と似てはいるが嗜好品以上のものだ、イエスかつノーだという意見もある。

ネットで検索すると、まだ若い歌手で、「自分の音楽はチョコやケーキのような嗜好品だ。なくても生きていけるけれども、あれば日常をキラキラさせられる。そんな存在でありたい」と語る、ハナエさんという女の子がいました。嗜好品的でありたいというのは、メジャーな大ヒットソングや国民歌謡ではなくても、みんなにちょっと口ずさまれ愛される、嗜まれる歌手になりたいということのようです。

数年前から私は、嗜好品の枠を広げようという提案をし、音楽も新しい嗜好品範疇の枠内で検討してきました。口に入る、携行できる小物体を、私たちは従来、嗜好品と呼んできましたが、定形のない体験やサービスにまで範疇を広げ、指示対象を増やしていこうと考え、新しい定義として、「ストレスを緩和するもの」すべてを嗜好品と呼んだらいいではないか、という「アンチ・ストレッサー＝嗜好品」説を唱えたわけです。

まだ飢餓や戦争に苦しんでいる地域の方々には、ストレス以前に身の危険や栄養上のサバイバル問題があるわけですが、身の安全が保障され、比較的豊かな社会に住んでいる日本はじめ先進国市民にとっては、やはりストレスこそが心身の不調や成人病の最大の敵で

すから、「アンチ・ストレス」という視点から嗜好品を見直すことが必要だろう、という考え方です。

さて、その意味で音楽は嗜好品といえるでしょうか。そもそも現代日本において、いかなる状況で嗜好品が必要かという、「ヒマなとき」というのが、豊かで平和な社会に暮らす多くの若者たちの答えです。いわゆる余暇やレジャーという意味の「暇」ではない。労働や勉強以外の時間がヒマなのではない。自分のモチベーションやモラル、自己実現度が低い(若者語では「落ちている」「病んでいる)とき、自分が「リア充」ではない状態が、ヒマなのです。つまり、優等生でもスポーツ万能でもバイトの鬼でない、フツの若者にとって、いちばんヒマなのは働いているときと勉強しているときです。

これまでの定義とはまったく逆転しています。貧困や飢餓に苦しむ途上国の若者からすれば、ぜいたくのきわみですが、このヒマがストレスとなって、若者たちを苦しめている。さらにテンションの低い授業中や労働中に、先生や上司、客や、ときには同僚・同級生といったストレス源によって、気分が落ち込んで、しょうもないと感じているときにこそ、切実に音楽がほしくなる。

さらにヒマを分析すれば、イライラしたり、落ち着かなかったり、ストレスが溜まっていたり、寝不足だったり、その場で居場所がない、居心地が悪いとき、それは「非-間(ひ-ま)」であることとなります。レジャー、余暇という意味ではなく、「間(ま、timing)」が悪い「アンチ・タイミング」な状態を指します。飢餓、戦争、貧困、強制労働から遠く離れた、平和で豊かな社会の若者たちにとって、ヒマなときにスパッと気分を変えてくれる、自分を持ち上げてくれる存在として、それが嗜好品か神かは別として、切実に音楽がほしい。

このように、嗜好品を「アンチ・ストレスサー、anti-stressor」あるいは「気分転換用の

お気に入り品、refreshing favorites」と新しく定義しなおすならば、音楽は十分に嗜好品たりうるのではないかというのが、私からの提案です。

3. 「ディープフロー」かつ「マイクロフロー」の音楽

もう少し別の角度から、お話をしてみましょう。チクセントミハイ(M. Csikszentmihalyi, 1934-)という心理学者の「フロー(流れ)」という考え方です。コンピュータの領域では、流体力学のシミュレーションなどのフローが話題となりますが、もともとは液体・気体の流れる比喩に由来する、伝統的イメージから来ています。

万物流転といえば、古代ギリシャのヘラクレイトス説ですが、現代の経済学にせよ、情報学にせよ、流れること対留まる、溜まる、淀むこと概念対は、「フロー」と「ストック」という考え方で表わされてきた。

チクセントミハイは、この概念対に着目し、意識がフローになるときが、気持ちよく高揚してハッピーだと考えた。その「フロー」という心理・意識状態のなかでも、「ディープフロー」は、深く、深く心が集中し、何かに没入し、長時間ハマって、気持ちよくなる状態であり、これに対して「マイクロフロー」という、やや浅くて、短時間ハマる状態に分けられると彼はしています。

「ディープフロー」の特徴は、ものすごい集中、没頭、高揚感、忘我で全能感がある点。運動スポーツや音楽コンサートなど、とくにチクセントミハイは、ロッククライミングとロックコンサートという、どちらもロックのついた二つの例を、「ディープフロー」の典型として挙げています。

同時に、「マイクロフロー」の例としては、日常的でちょっと空想的、創造的、社交的で、運動としても口だけを動かすような、雑念、

テレビ、エクササイズ、ホビー、パーティを挙げており、ちゃんと嗜好品も忘れずに入れています。ただし、嗜好品は「マイクロフロー」的で、音楽は「ディープフロー」的だという二元論は、少し粗雑すぎる。ディープとマイクロ両者の違いは、対象が異なるのではなく、様相や局面が異なると考えるべきでしょう。たとえば、好きなミュージシャンのライブはディープだけれど、同じ曲をふだん iPod で聴く音楽体験はマイクロのほうだといった具合でしょうか。その意味では、他の嗜好品や嗜好体験に比べて、音楽というジャンルはフローに関していえば、深い／浅い、大きい／小さいという振幅が大きい、いわばダイナミックレンジの大きいジャンルだといえそうです。

4. 「ノリ」と「キレ」のダイナミクスと音楽

実はチクセントミハイの説は、ポジティブ心理学という、幸せになるための心理学の流派の一つだといわれています。さらに遡ると、彼の説は心理学者マズロー (A. H. Maslow 1908-1970) の自己実現の5段階説を参考にしたものようです。

人間は、まず生理欲求が、次に安全欲求が満たされ、社会欲求と承認欲求が満たされたうえで、自己実現していく。こういう段階を踏まえて、フローがそれを達成されるとすると、この4段階目、5段階目ぐらいの自己実現レベルに「ディープフロー」があると読むこともできます。

さて、チクセントミハイとマズローの説を、メディアに関する私の年来の持論である「ノリ (乗り・祝、syntony)」と「キレ (切れ、distony)」のダイナミクスから、自分なりにまとめてみましょう。人は音楽やメディア、場の気分や周囲の人たちに同調的にシンクロして乗っていくとき、忘我的にノリノリにノッていく様相と、その次元をキレキレにぶち切

って、虚空の中に自分だけという脱我の境地に入ってしまう様相との二元論を揺れ動きつつ、両者が「弁証法」的に交代しつつ、連続線上にあるのだというのが、「ノリ」と「キレ」のダイナミクスです (このヘーゲルに由来する弁証法概念については、末尾の文献を参照のこと)。

「ノリ」と「キレ」が二元論的に矛盾対立し、交代しつつ、同時に連続線上にあるという私の説は、ポケベルやケータイに若者がなぜハマるかという問題意識から出発した理論です。まず、「マイクロフロー」の面から見れば、嗜好品やケータイなどのメディアもそうですが、環境世界の中に同調させる形で、個人的な自分の嗜好と居場所を確保していく。これが低いレベルで生理欲求、安全欲求、社会欲求という段階にあたります。さらに「グループフロー」のレベルで社会を超えて承認段階に達し、最終的には突き抜けてしまう。そうした「ディープフロー」レベルでは、全身全霊をあげて没入的に、自分独自の世界を創造する段階まで行く。

その意味で嗜好品と音楽は、どちらも、この上り階段と下り階段、両方のステップをもっているのではないかと思います。たった一杯のコーヒー、一本のケータイ、ミュージックプレイヤーがあるだけで、一人でいても安心な居場所がつかれ、みんなと社交ができ、さらに衆人環視のなかにあっても自分独自の自己実現、幸せが得られる、似かよった連続性があるのではないのでしょうか。

以上、嗜好品と音楽について「フロー」「欲求」「幸福」といったキーワードから考察してみると、嗜好品は音楽的であり、音楽は嗜好品的であるという両方の要素を認めることができました。完全にイコールであるとか、完全に包含関係にあるとはいえないまでも、相互に密接な類似性があるということです。

5. アドルノからケージへ

私なりに結論をいったん出したところで、アドルノ (Th. W. Adorno, 1903-1969) という難解な哲学者、社会学者の音楽社会学とくに聴衆類型論にふれたいと思います。

ちなみに私も大学のときにアドルノの『啓蒙の弁証法』を読まされて、「ドイツ人でもよくわからないドイツ語」として有名なテキストで、ドイツ語が嫌いになったほどです。私に『啓蒙の弁証法』を読ませた指導教官・徳永恂さんは、若き日にハイデガー (M. Heidegger, 1889-1976) のところに留学しようとしたら、タイミングが合わなくて、たまたま近くの大学だというだけで紹介されたアドルノに、日本人として初めて師事し、直接教わった方です。だから、私はめちゃくちゃ不肖とはいえ、系譜的には「アドルノの孫弟子」となるわけですが、その難解さは変わりません。

アドルノの音楽社会学のうち、人は音楽をどのように聴き、体験するかというタイプをつくった8つの聴衆類型論があります。

まず、①専門家 (エキスパート) と、②構造的聴取者。どんな音楽の譜面も読めるし、構造的にわかる、プロである。古典から学んだ音楽エリート、アドルノが評価したのは、不協和音や無調音楽、シェーンベルク、ウェーベルン、ベルクといった前衛的な音楽家たちで、当時としては超一流、孤高の美学的境地を歩んでいた。

アドルノ的に許せるレベルは、次の③よき聴取者と、④教養聴取者まで。俗物ではあるけれども音楽好きであるレベル。クラシックを中心に理解が深い。こういう音楽の聴き手は、現在、日本にも世界にもたくさんいます。それから⑤情緒的聴取者に、⑥ルサンチマン (復讐) 聴取者と、カテゴリー名からして、アドルノの点数が辛くなっていきます。これは知性や教養がないものだから、音楽によっ

て復讐しているという類型です。

つづいて⑦娯楽聴取者と、⑧無関心者です。何か前衛的な音楽に挑戦したい、知的な営みとして格闘したいと思っているのではなくて、フツーに何気なく楽しみたいという、現代人の多数派です。アドルノの評価は、「この人たちにとって音楽は刺激の源泉に過ぎない」「快適な慰安の手段としてのみ要求され、平板化している」「喫煙と類似している」「ながら聴取者にすぎない」と、さんざんです。貴族的音楽エリートによる、いちばんの批判の対象であり、「嗜好品としてのみ音楽を享受する」下の下の音楽鑑賞者が、われわれであるという指摘です。

ポップスを愛好する私たちからすれば、「ああ、そうですよ。どこが悪いの？ うちら、ながら聴取者ですが、何か？」と反感を感じざるをえません。逆に、「娯楽聴取者」「嗜好品的音楽享受者」が主流派である点で、現代の音楽社会学も、アドルノふうの貴族的高踏学説から大衆学説へと必然的に変わっていかざるをえないでしょう。

たとえば、前衛的な音楽思想家ジョン・ケージ (J. Cage, 1912-1992) は、音楽を譜面からも、楽器からも、音そのものからも「解放」しようとした。それは、まさにカゴ (英語で cage) に囚われた鳥を、空へ解放つ静かな音楽の解体であり、同時に理想化しようとする革命でした。残念ながら、彼の真意を理解したくない貴族的専門家たちの多くは、いまだに「ジョン・ケージ学」といった鉄壁の学問的甲冑を分厚く着て、彼の哲学を、再び「籠の鳥」として専門アカデミーの牢獄に閉じ込めようとしています。

はたして音楽は嗜好品でしょうか。ケージが本来追求した理想的意味で、彼が愛した「キノコ」や「沈黙」「偶然」は、そのまま「音楽」であり、同時に「嗜好品」でもあったのではないのでしょうか。未来の嗜好品は、経口的な味覚対象というカゴを抜け出し、ケージの音

楽のように、聴覚を超えて全身・没入的な五感メディアを乗り物として、哲学的な高みにまで昇っていきませんか。

私としては、可能性はある。嗜好品と音楽はイコールではないけれども、集合でいうとAかつBの重なり部分は大きい。まだまだケージの理想にまで到達できない点は言うまでもありませんが、「気分転換用のお気に入り品」あるいは「アンチ・ストレッサー」体験としての音楽は、十分に嗜好品的ではないかと考えます。

2009年、私は嗜好品を排斥する栄養学・医学的な教条・ドグマを排する点で、①「アンチ・ドグマ」のテーゼを唱えました。さらに、哲学者パスカルが嗜好品などの気晴らしを否定した点で、彼が小確幸(小さな確かな慰め)を求めるのはいけない、唯一の絶対的な幸福を求めるために、ちゃらちゃらと気を散らすような「気分転換用のお気に入り品」は全部寄り道、回り道に過ぎないと説いた点で、私たちは②「アンチ・パスカル」のテーゼを唱えました。さらに本稿でも繰り返し述べたように、③「アンチ・ストレス」テーゼは、もっとも重要なテーゼとなります。

比較的豊かな社会に住んでいるわれわれ先進国市民にとって、長生きするにしても、幸福な人生を送るにしても、最大の敵がストレスであるわけですから。

嗜好品とは、少なくとも平和な社会における気分転換メディアとしては非常に有効で、ある意味では知的、感覚的な冒険心発露のための一つのシンボルであり、もちろん音楽もまた、そうである。今後とも嗜好品文化研究会では、はじめから結論ありきの決めつけをせず、ケージの理想を目指して、いろいろな可能性を考えていきたいと思えます。

(了)

* 本稿は、第14回嗜好品フォーラム(2016年5月21日、キャンパスプラザ京都ホール)における、基調報告講演「音楽は嗜好品か?—フローとしての音楽の重奏性」を改稿したものである。

【参考文献】

- (1) 藤本憲一『ポケベル少女革命——メディア・フォークロア序説』(1997) エトレ
- (2) Kenichi FUJIMOTO (2000) Syntony, Distony, Virtual Sisterhood, and Multiplying Anonymous Personalities-Invisible Pseudo-Kinship Structures through Mobile Media Terminal's Literacy, in *Senri Ethnological Studies* 52 National Museum of Ethnology
- (3) 藤本憲一「SHIKOHINをめぐる哲学ふう嬉遊曲——嗜好品研究のパラダイム転換」『TASC Monthly』416 (2010) たばこ総合研究所
- (4) 藤本憲一「SHIKOHINの距離学——若者の“ソトごもり”の謎を解く」『TASC Monthly』454 (2013) たばこ総合研究所
- (5) ミハイ・チクセントミハイ『楽しみの社会学』(1975: 今村浩明訳 2001) 世界思想社
- (6) アブラハム・マズロー『人間性の心理学——モチベーションとパーソナリティ』(1954, 1970: 小口忠彦監訳 1987) 産能大出版部
- (7) テオドール・W. アドルノ『音楽社会学序説』(1962: 高辻知義・渡辺健訳 1999) 平凡社
- (8) マックス・ホルクハイマー+テオドール・W. アドルノ『啓蒙の弁証法——哲学的断想』(1947: 徳永恂訳 1990) 岩波書店
- (7) ジョン・ケージ『サイレンス』(1961: 柿沼敏江訳 1996) 水声社

藤本 憲一／ふじもと けんいち●1958年兵庫県生まれ。大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程修了。編集、広告、都市計画などの職を経て、現在、武蔵川女子大学生生活環境学部情報メディア学科教授。専門は情報美学、メディア環境論。嗜好品文化研究会メンバー。主な著書は『ポケベル少女革命——メディア・フォークロア序説』(エトレ1997)、編著として『テリトリー・マシン』(現代風俗研究会年報2003)、共編著として鶴飼正樹・永井良和・藤本憲一編『戦後日本の大衆文化』(昭和堂2000)など。論文は「茶の間と集い」(『日本人の暮らし——20世紀生活博物館』講談社2000)、「コンビニ——人見知りどうしが集う給水所」(『無印都市の社会学』法律文化社2013)、「スマートモブズ、ポケベル少女、ながらモビリズム」(『社会学事典』丸善2010)など多数。

嗜好品文化研究

第2号
(2017)

特集 音楽と嗜好品

音楽の嗜好を科学する

福井 一

音楽は嗜好品か

岡田 暁生

音楽の嗜好 — 時代・民族・個人における嗜好の違いを通して
嗜好対象としての歌声 — クラシック歌唱からポピュラー歌唱へ
アレンジャーは音楽の料理人

中村 孝義

宮本 直美

吉村 晴哉

近代経験のアリーナとしての歌手の身体 —

チベタン・ポップ制作に見る「屈折する近代」と嗜好品の動態性

山本 達也

音楽的嗜好の伝播と横領 — 近代日本の民衆音楽の経験に注目して

小野塚 知二

香りがつなく人と音楽

平井 丈二郎

ノリの意味と構造 — 音楽する社会・再考

小川 博司

音楽は嗜好品か？ あるいは嗜好品は音楽たりうるか？

藤本 憲一

歌謡曲を愛でる

近田 春夫 × 小川 博司

音楽と嗜好品 [討論] 第14回嗜好品文化フォーラム報告

論文

中世イスラーム世界における乳香

馬場 多聞

カートを嗜む — 他の嗜好品との比較から

大坪 玲子

嗜好品文化研究会

〒604-0863 京都市中京区夷川通室町東入巴町83番地 (株)CDI 内

研究誌 嗜好品文化研究 第2号 (2017)

編集・発行 嗜好品文化研究会
[事務局]
〒604-0863 京都市中京区夷川通室町東入巴町83番地 (株)CDI 内

発行日 2017年3月31日

印刷 (有)ダイヤ印刷 無断転載禁止

頒価 1,000円 (本体926円+税)

©2017 嗜好品文化研究会

Printed and Bound in Japan ISSN 2432-0862